様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 22 年 5 月 7 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：　2007 年度～2010 年度
課題番号：１９３３００４３
研究課題名（和文）20 世紀イギリスの経済社会改良思想：ニュー・リベラリズムとニュー・レイバー
研究課題名（英文）A Study of Thoughts on Improvement of Economic Society in 20th Century Britain: From New Liberalism to New Labour

研究代表者
関　源太郎（SEKI GENTARO）
九州大学・経済学研究院・教授
研究者番号：６０１１７１４０

研究代表者の専門分野：経済思想史、経済学史
科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想
キーワード：20 世紀、イギリス、経済社会改良思想、ニュー・リベラリズム、ニュー・レイバー

１．研究計画の概要

20 世紀イギリスの経済社会改良思想を、ニュー・リベラリズムの思想の形成、展開、変質、外観的消失、そしてニュー・レイバーによる再生を基軸に動的展開過程として跡づけ、再構成し、再評価することが、本研究の基本的な研究目的である。

すなわち、まず主に古典派経済学と H.スペンサーの社会進化論を再検討し、古典的自由主義からニュー・リベラリズムの形成への過程を断絶と連続の関係において解明する。さらに、この形成されたニュー・リベラリズムの経済社会改良思想の戦間期までの展開をたどり、その政策・制度デザインの特徴を自由帝国主義、キリスト教社会主義およびケンブリッジ経済学派との対比で描き出す。

加えてケインズ経済学を確率革命との関連で捉えなおし、それとニュー・リベラリズムの関係を新たに解明する。加えて、ウェッブ夫妻に端を発する LSE の行政学的経済社会改良思想を戦後のファイナーやロブソンらの仕事に拠りつつ取り上げ、戦後のニュー・リベラリズムの思想の具体的様態を明確にする。

最後に、1970 年代のニュー・ライトの経済思想に基づく経済社会の見直しが逆にニュー・レイバーによるニュー・リベラリズムの思想的伝統を現代の諸変化のなかで再生させたことを明らかにする。こうして、ニュー・リベラリズムの思想的伝統を 20 世紀イギリスの経済社会改良思想を貫く思想原理として改めて検証する。

２．研究の進捗状況

功利主義的な心理学および古典派経済学の展開とイギリス経験論哲学の発展とを関連づけて検討した結果、19 世紀後半以後 C. ダーウィンの進化論が有した歴史的意義の重要性が明らかになった。この点を踏まえ、イギリスの古典的自由主義からニュー・リベラリズムへの転換を改めて把握し直すために、18 世紀の啓蒙期と 19 世紀のダーウィン革命以後の時期とに大別し、A. スミスに遡って彼の人間本性論や経験主義を再検討した。その結果、スミスのそれらは、生物学的な特徴を持つことが明らかになった。

19 世紀末から 20 世紀初頭の A. マーシャルの「経済生物学」には進化論的思考が刻印されており、その論理展開は主著『経済学原理』から後続の『産業と交易』までたどることにできることを明らかにした。この点については精緻化して、著書『マーシャル経済学研究』として出版した。他方で、同様に進化論的思考を内在化していた J. A. ホブスンのニュー・リベラリズムを取り上げると共に、合わせてホブスンと同時代のニュー・リベラリズムの展開・変質について吟味した。この研究成果の一部は、2010 年 5 月に刊行予定の著書『J. A. ホブスン　人間福祉の経済学』に盛り込まれている。

戦前期から戦後期について、まずウェッブ夫妻の経済思想を基軸として、LSE の初期の特徴に関して、ガヴァナンス、行政学などのキーワードを中心に研究を進め、論文にまとめ、オーストラリアの経済学史学会の機関誌に発表した。と同時に、ウェッブ夫妻につい

ては著書『福祉国家の効率と制御－ウェッブ夫妻の経済思想－』として刊行した。さらに、ニュー・レイバーの経済政策からその経済思想を炙り出し、それが現代における「リヴィジョニズム」としてニュー・リベラリズムと共通する思想を宿していることを明らかにした。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

20 世紀イギリスの経済社会改良思想をニュー・リベラリズムの思想の形成・展開・変質・外観的消失・再生の歴史過程として跡づけるという本プロジェクトが主たる目的としている研究は、代表者および研究分担者の個々の研究によって順調に進捗してきた。

ニュー・リベラリズムの形成においてダーウィンの進化論が重要な意味を持っていたことを確認した。こうした進化論的見地と結びついた世紀転換期のニュー・リベラリズムの経済社会改革思想それ自体の展開についてはホブスンを中心にたどり、合わせて、R. H. トウニーらのキリスト教社会主義者およびマーシャルらのケンブリッジ学派についても経済社会改良の見地から解明してきた。他方、ウェッブ夫妻の経済社会改良思想については著書にまとめることができたし、LSE に関しても、特にその初期についてであるが、ガヴァナンスや行政学をめぐって整理することができた。戦後の展開については、これまで軽視していた 50・60 年代の労働党中道右派の思想を戦後期のニュー・リベラリズムの改良思想の一変種として理解する手がかりを得ることができた。また、ニュー・レイバーの経済政策とその思想は、現代社会におけるリヴィジョニストの観点からの改良思想であり、それは、サッチャリズム（ニュー・ライト）の登場によって消失したかに見えたニュー・リベラリズムの経済社会改良思想の再生として解釈できることを明確にした。

４．今後の研究の推進方策

本年度の夏休みまでに開催する研究会において、このプロジェクトの個々のメンバーが積み上げて来た研究を突き合わせ、相互の連携とその問題点を点検・確認しあい、本年度後半に予定している第 3 回国際ワークショップにおいて発表する個別のペーパーの作成に向けて、その基本的指針を確定する。

国際ワークショップでは、本研究計画の策定当初から支援を仰いできた海外研究協力者を含めて数名の外国人研究者を招聘し、これまでの研究成果をさらに深め、そこでの議論を踏まえて、研究成果報告書を本年度末までに作成する。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①江里口　拓、The Webbs, Public Administration and the LSE: the Origin of Public Governance and Institutional Economics in Britain, History of Economics Review (History of Economic Thought Society of Australia), 50, 2009, pp.17-30.査読有り。

②関　源太郎、The Significance of New Labour's Thoughts: With Special Reference to Its Economic Views in the 1900s, 経済学研究（九州大学経済学会）76-1, 2009, 27-43. 査読なし

③江里口　拓，ウェッブ夫妻における「国民的効率」の構想－自由貿易，ナショナル・ミニマム，LSE－，経済学史研究，50-1，23-40，2008年，査読有り

〔学会発表〕（計 15 件）

①高　哲男、”Instinct as a Foundational Concept in Adam Smith’s Social Theory”, Smith in Glasgow ’09 at University of Glasgow Adam Smith Research Foundation, 2009 年 4 月 1 日, University of Glasgow

〔図書〕（計 6 件）

①岩下　伸朗、『マーシャル経済学研究』ナカニシヤ出版、2009 年、xiv+315

〔産業財産権〕

○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕